

人権学習をつなぐ ～持続可能な取組を求めて～

西条市立西条西中学校

教諭 藤友弘子

〈ここで歩みを止められない — 持続可能な取組とは —〉

西条西中学校は、平成24年度から8年間、毎年7月に、2年生が全員でハンセン病国立療養所大島青松園を訪問し、そこでの学びを小地域懇談会で地域の大人に伝えるという活動を続けてきました。



また、文化祭では、3年生がハンセン病問題をテーマにした人権啓発劇の上演を続けてきました。生徒は、正しく知り、事実を確かめ、仲間と考えを深め合い、差別をなくすために実際に行動することを、代々、先輩の姿を見て学んできたのです。途絶えることなく継続されてきたこれらの学習や啓発活動に、生徒たちは誇りを持って取り組んできました。

ところが、令和2年度。新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、大島青松園での現地研修は中止が決定し、文化祭は、開催そのものが危ぶまれました。

「差別に休みはない。」これは、私が出会った、ある差別と闘っている方の言葉です。「先生、先生らの仕事に休みはあっても、わしらが受けとる差別に休みはないんじゃないけん……。」コロナ禍にあって、私たちは、今、ここで歩みを止めるわけにはいきません。こんな時代だからこそ、これまでの人権学習の歩みをどうやって持続させていくのか、どうやったら、深めていくことができるのか。生徒と教員が一つになって、模索し始めました。

〈自分たちが「語り部」となる — 立ち上がった3年生 —〉

そこで立ち上がったのが、当時の3年生でした。「2年生が大島青松園に行けないのなら、自分たちが授業をすればいい。」ということになったのです。

3年生の授業を受け、2年生は、行くことのできなかつた大島青松園に思いを馳せながらハンセン病問題学習をより深めることができ、1年生は「先輩の授業」という形で、ハンセン病問題を自分たち自身の課題と捉えることができました。

コロナ禍で人権啓発劇を行うことについて、職員間では様々なことが議論されました。中止すべきという意見もありましたし、縮小して朗読劇にしてはどうかという案も出ました。しかし、ここでも大勢を決したのは3年生の志でした。今年の人権啓発劇をどうするかについてアンケートを行った結果、大半の3年生が、全員で舞台劇をつくりたいという強い意思を示したのです。3年生は、「代々受け継がれてきた伝統を、自分たちの代で途絶えさせたくない。」「学習してきたことを劇という形にして後輩に伝えるのは自分たちの使命だ。」という熱い思いを持っていました。彼らの熱意に応えるべく、できる限りの感染予防対策を施したうえで、コロナ禍の令和2年度も、3年生全員による人権啓発劇が行われました。

また、3年生は、自分たちが学んできたハンセン病問題を、他校の生徒に伝えることにも挑戦しました。丹原東中学校や西条南中学校の生徒会と、オンラインで交流学習会を行い、互いの取組を共有する活動を行ったのです。コロナによる中止や縮小の流れに対抗しようと知恵を絞った結果、新しい取組を生むことになりました。

〈持続可能にするために — 新たなカタチを求めて —〉

そして、令和3年度。あの3年生は卒業し、大島青松園での現地研修を経験した生徒は、とうとういなくなりました。この後をどうつないでいくのか。本校にとって、今が本当の正念場です。現地に行けない生徒たちが、過去の先輩たちに近い立ち位置に立ってハンセン病問題を考えられるようにするためにはどうすればいいのか。考えた末に行きついたのは、授業改善でした。今までとは違った視点からハンセン病問題を学習するために、新しい資料を作ろう。そんな思いから、大島青松園入所者をモデルにした自作資料「はじまり」が出来上がりました。資料に登場する主人公の生き方を学び、差別は決してどこか遠くにあるのではなく自分自身の心の中にあるのだということを自覚した生徒は、まずは自分の家族を啓発しようと誓い合いました。

今、生徒たちは、先輩たちが行ってきた小地域懇談会も小学校への出前授業もオンラインによる交流学習会も、大島青松園の実際をその目で見、入所者の方のお話を自分の耳で聞いてきた先輩と同じようにはできません。しかし、だからこそ自分たちにできることを見つけようとする生徒たちと共に、「with コロナ」の時代を差別のない社会にするために、私たちがなすべきことを今後も模索し続けます。

